

# 中野弘一教授送別の辞

並木 温

東邦大学医学部医学科，卒後臨床研修/生涯教育センター教授

中野弘一教授と初めてお会いしたのは、私がまだ小学生か中学生の頃であったかと思います。中野先生と私の兄が同じ中学・高校に在学していたこともあり、一度私の実家にお越しいただいた際にご挨拶いたしました。ただ頭を下げただけでありましたが、まさかその後これだけ密にご指導を受ける関係になろうとは夢にも思っておりませんでした。

東邦大学医学部在学中には、4年先輩に中野先生が在籍されていることは認識しておりましたが、特に接点はありませんでした。卒業後は中野先生は当時の大森病院第二内科、私は当時の大橋病院第三内科にて研修をスタートしましたが、専攻した領域も全く異なり、非常に若くして心療内科の教授にご就任されたことは存じておりましたが、特に意識することもありませんでした。

中野先生との濃厚な関係が始まったのは、翌年からの新臨床研修制度の開始を前にした2003（平成15）年3月に、私が大橋から大森に異動することとなったときからでした。異動先の東邦大学医学部卒後臨床研修/生涯教育センター（以下、研修センター）の責任者（センター長）の中野先生はなかなかの変わり者だぞ、お前大丈夫か、などの話をいろいろな方面から耳にしましたが、はるか昔に一度ご挨拶をしたことがある、という訳のわからない理由だけで、何とかなるだろう、取って食われることはないであろう、と不安になることは全くありませんでした。

研修センターへ赴任はしたものの、現在の大森学事部学事課のまさに窓際に、各スタッフの机と椅子とパソコンが存在するのみの組織でありました。教室員各自の机と椅子すらなかった大橋病院第三内科での生活を当たり前と思っていた私はこんなものであらうと感じておりましたが、中野先生や当時の塩澤正彦課長（現法人本部経営企画部長）は今でも申し訳なかったと気にしてくださっております。そのような環境でスタートした研修センターでの活動ですが、中野先生と一緒に仕事をさせていただき、まさに目か

らうろこ、驚きの毎日でありました。とにかく考えるスケールがわれわれ凡人と全く異なっており、一見的外れているような施策も、しばらくするとその先見性や妥当性に感心するという繰り返しでした。性格的には中野先生と私とはもしかしたら真逆なのかもしれませんが、相性を心配してくださる先生方もいらっしゃいましたが、私としては本当に多くのことを学ばせていただいた充実した日々であり、現在曲がりなりにも東邦大学医学部のために仕事をさせていただけているのも中野先生の教えのお蔭である、と心から感謝しております。

こんなこともありました。私が自分自身の蜂窩織炎を甘く見て敗血症になりかけるまで放置して、入院となったことがありました。自分自身の健康管理の怠慢によるものでありましたが、A群溶血性連鎖球菌（いわゆる人食いバクテリア）が起因菌であり、場合によっては命にかかわる状態でありました。私自身は主治医の大森病院総合診療外科の島田長人先生（大学時代の同級生）を信頼して悲観することは全くなかったのですが、後に聞きますと中野先生は本当に夜も眠れないほどご心配してくださり、いろいろな先生方にご相談して情報を集めていただいていたのであります。このことに限らず、中野先生のバックボーンは常に「弱い立場にある側への支援」で貫かれており、このことが患者さんをはじめとした多くの中野教信者の心をとらえて離さない一番の理由であると感じております。

研修センターセンター長の後、その才能と能力を東邦大学全体の男女共同参画や教育・研究の支援、さらには産学連携に注がれ、東邦大学にとってはなくてはならない中野先生であります。今後も東邦大学のために働いていただきたいと願う一方、弟子を自称する一人としてはもう十分にご貢献いただいたので、少しゆっくりされてからもう一つの才能である著作活動に打ち込んでいただきたいと願う気持ちもあります。いずれにしろご健康に留意され、ご自愛下さいますようお願いして、送別の辞といたします。